実践報告

地域の防災課題解決に向けた多職種連携教育の実践
－ふくしフィールドワーク実践における取り組みから－

髙　村　秀　史
日本福祉大学　全学教育センター
村　川　弘　城
日本福祉大学　全学教育センター

The multi-type of job, class practice of the other fields cooperation for the local disaster prevention problem solution.
-Initiatives in Fukushi fieldwork practice-

Shuushi TAKAMURA
University Educational Center，Nihon Fukushi University
Hiroki MURAKAWA
University Educational Center，Nihon Fukushi University

Keywords：地域防災課題，多職種連携，フィールドワーク，授業実践

Abstract

Nihon Fukushi University Inter-Departmental Education Center has offered “”Fukushi fieldwork practice ' at the fields of three cities and towns: Mihama town, Handa city, and Tokai city since 2017. The Fieldwork has aimed at thinking about the ideal way of interprofessional collaboration needed for the resolution of regional issues and learning about the roles of each subject of the region. It offers learning based on a step of “prior learning, fieldwork, and review”. It also adopts an educational method of service learning which emphasizes the experiential learning at the communities. In this article, we report a content which adopts the fieldwork themed on “learning of disaster prevention considering regional characteristics” and it has been carried out in Mihama town since 2021. It has been offered as a workshop containing such fieldworks: disaster prevention camp and communication with workers there.

It puts high value on practical fieldwork, however, because of the pandemic of the COVID-19, it proceeded as a significant restriction from 2021 to 2022. Since 2023, the classification of the COVID-19 has changed into the Category Vinfectious Diseases, so as originally planned, the fieldwork carried out contained a stay. In this article, we report the knowledge obtained from the content of the subjects and fieldworks.

要旨

日本福祉大学全学教育センターでは，知多半島の 3 つの市町（美浜町，半田市，東海市）をフィールドとして，地域課題解決に求められる多職種連携のあり方や，地域の各主体の役割など学ぶことを目的とした「ふくしフィールドワーク実践」を 2017 年度より開講している．科目では，地域社会での体験学習を重視した地域連携教育を取り入れ，「事前学習，フィールドワーク，事後学習」という展開を基本として学びを提供している．本稿で報告する「地域特性を考慮した防災の学び」をテーマとした内容は，美浜町をフィールドとして，防災キャンプや地域で働く人々とのコミュニケーションなどのフィールドワークを取り入れた内容で，2021 年度から提供されている．フィールドワークを重視する科目であるが，2020 年度に発生した COVID-19 感染症拡大の影響から，2021 年度と 2022 年度は感染症予防に対する対策を重視し，内容を大きく制限して進められた．2023 年度に COVID-19 ウィルスが 5 類感染症に移行されたことから，当初の計画にあった宿泊を取り入れた内容を展開した．本稿では，科目の内容や実践から得られた知見を報告する．

1. はじめに

多職種連携というキーワードは主に，医療・福祉分野の教育や現場で使用される場合が多い．小田（2021）は，医療・福祉現場における多職種連携について，「『個々人では対処が困難で対応に限界がある』課題が根底にあり，この課題を起点として達成したい解決の共通認識の下に，それぞれの視点や専門性が活かされ，またその専門性を相互に補完し合いながら課題解決に向けた取り組み」と定義づけている．キーワードとして「『単独解決できない課題』とそれを多角的に捉える『異なる専門性や視点を持つ多様なアクター』と，課題解決に向けた『共通の目的』」をあげている．

小田のあげた多職種連携のキーワードは，医療・福祉分野に限らず，その他多くの分野でも当てはめることができると考えられる．例えば防災・減災にキーワードを当てはめてみる．防災・減災には，災害の被害を軽減するという「共通の目的」がある．災害の被害を軽減するためには，災害を引き起こすハザードを理解することや，災害への備え，災害時の対応などを学んで，その知識や技能を身につけることが必要である（諏訪 2020）．ハザードを理解するためには地理学が必要であろう．災害を発生させる誘因を理解するためには自然科学が必要であろう．自然災害が社会や人間にどのような影響を与えるかを知り，備えるためには人文社会科学の知識が必要であるし，障がい者や乳幼児や高齢者などの要配慮者や，避難行動要支援者の災害時対応には福祉分野の知識が求められるであろう．つまり，単に防災・減災と言っても，多種多様な課題があり，「単独では解決が難しい」．解決には「異なる専門性や視点を持つ多様な人材」や知識が必要である．以上のように，医療・福祉分野以外でもキーワードを当てはめることは可能であるし，多くの分野で多職種が連携することは有用であると考えられる．今後社会に出る学生が，多職種連携を知り，学ぶことは重要であると言える．

文部科学省の推進する「地（知）の拠点整備事業」（Center of Community – 以下大学 COC 事業）が 2014 年度に採択されて以降，地域連携教育，多職種連携教育の検討が活発に行われ，多種多様な取り組みが進められてきた．本稿で報告する「ふくしフィールドワーク実践」も，大学 COC 事業を契機として検討され，本学全学教育センターにおいて開講された科目である．地域において必要となる多職種や多様な地域主体の連携について，様々なテーマのもと地域における学部混成の実践的授業を通して学ぶことを意図した科目として，2017 年度から開講されている（日本福祉大学 b　2019）．本稿では 2021 年度から報告者が担当した，地域の防災課題解決を目的としたふくしフィールドワーク実践の内容や，実践から得られた知見を報告する．

2. 科目

2.1　ふくしフィールドワーク実践の概要

本学では，多職種連携教育を，Step1（共通して理解すべき事項）・Step2（他の職種や業種の理解）・Step3（多職種連携 - 学部混成での実践的な学び）の三つのステップで検証していく仕組みを検討し，提起している．ふくしフィールドワーク実践は，その中の Step3 に位置付く科目である（日本福祉大学 b　2019）．履修は 3 年次で設定されているが，毎年度 4 年生も多く履修している．本学は，愛知県の知多半島にある 3 つの市町（美浜町，半田市，東海市）にそれぞれキャンパスが所在している．各キャンパスに設置されている学部は次の通りである．

表 1　ふくしフィールドワーク実践のテーマ

	美浜キャンパス	東海キャンパス	半田キャンパス
2017 年度	ふくしスポーツを核にした地域の関係づくり－子どもの異年齢間交流を通じて－	いきいき暮らせるまちを育む地域デザイン	一人の暮らしを皆で支える地域包括ケア
2018 年度	ふくしスポーツを核にした地域の関係づくり－子どもの異年齢間交流を通じて－	東海市の地域課題を理解し，課題解決のための各主体の役割を学ぶ	一人の暮らしを皆で支える地域包括ケア
2019 年度	ふくしスポーツを核にした地域の関係づくり－子どもの異年齢間交流を通じて－	東海市の地域課題を理解し，その解決に向けて他分野・多職種が連携することの大切さを学ぶ	一人の暮らしを皆で支える地域包括ケア
2020 年度	ふくしスポーツを核にした地域の関係づくり－子どもの異年齢間交流を通じて－	地域における異年齢間交流を通して学ぶ多文化共生社会	一人の暮らしを皆で支える地域包括ケア
2021 年度	地域特性を考慮した防災の学び－防災キャンプをツールとして－	NPO がめざす 0 歳から 100 歳の地域包括ケア	一人の暮らしが皆の支え合いになる地域包括ケア
2022 年度	地域特性を考慮した防災の学び－防災キャンプをツールとして－	NPO がめざす 0 歳から 100 歳の地域包括ケア	一人の暮らしが皆の支え合いになる地域包括ケア
2023 年度	地域特性を考慮した防災の学び－防災キャンプをツールとして－	NPO がめざす 0 歳から 100 歳の地域包括ケア	一人の暮らしが皆の支え合いになる地域包括ケア
2023 年度に追加された「子ども分野」	子どもが一人の「ひと」として生かされ・活かされる教育が受けられるように「学校を基盤とした支援」と「学校福祉の基盤づくり」を学び合う		

美浜キャンパス：社会福祉学部，教育・心理学部（前，子ども発達学部），スポーツ科学部
東海キャンパス：経済学部, 国際福祉開発学部, 看護学部
半田キャンパス：健康科学部

ふくしフィールドワーク実践では，キャンパス所在地である 3 市町それぞれの地域課題解決に求められる多職種連携のあり方やなどを学ぶことを目的としている．全学教育センターは学部学科にとらわれず，本学で学ぶ学生全員に対して学びを提供していることから，ふくしフィールドワーク実践は基本的に全学部生が履修することが可能な科目である．一部実習等で履修が難しい学部があるものの，異なるキャンパスや学部の学生が集まり，それぞれの専門性を活かしながら課題解決を志す内容となっている．クラスは異なる学部の混成クラスを複数開講し，地域社会での体験学習を重視した地域連携教育を取り入れ，「事前学習，フィールドワーク，事後学習」を集中的に展開して学びを深めている．各クラスはそれぞれのフィールドとテーマを持って学習にあたる．各フィールドに 1 クラス（20 人上限）計 3 クラスを，集中講義として開講している．2023 年度からはキャンパスにとらわれない「子ども分野」クラスも開講された．科目で得られた学びの成果は，e-learning 科目のコンテンツ開発への参画や各種報告・発表の機会などを通し，全学に遡及することを計画している（日本福祉大学 a　2016）．2017 年度から開講された各キャンパスのふくしフィールドワーク実践のテーマを表 1 に示す．

2.2　報告するクラスの概要

本稿で報告するふくしフィールドワーク実践は，2020 年度から報告者ともう一名の教員で担当し，美浜キャンパスの所在する愛知県知多郡美浜町のキャンパス周辺地域をフィールドとして開講されたクラスである．「地域特性を考慮した防災の学び」をテーマとして，自然環境や街並みなどの地域特性を考慮した防災・減災課題の発見・抽出や，防災キャンププログラムの体験を通して被災時の生活を擬似的に体験し，自助・共助を理解し自助力・共助力を向上させること，地域に在住や勤務する多様な人々の防災への取り組みを知ることなどを目的としている．2020 年度の履修生は社会福祉学部 4 名，スポーツ科学部 1 名，教育・心理学部 3 名，経済学部 5 名，国際福祉開発学部 2 名の 15 名であった．当初 9 月に開講される予定であったが，COVID-19 感染者の爆発的な増加により，翌年 2 月に変更された．本学では本来，2 月は授業期間外である．残念ながら多くの履修

辞退者が発生した．2021 年度の履修生は社会福祉学部 9 名，スポーツ科学部 6 名，教育・心理学部 4 名，経済学部 1 名の 20 名であった．開講は集中講義期間の 9 月であった．2023 年度は社会福祉学部 3 名，スポーツ科学部 3 名，教育・心理学部 3 名，経済学部 2 名の 11 名であった．開講は集中講義期間の 8 月であった．全てのキャンパス，学部から履修生が集まるとはならなかったが，異なる学部の学生が履修した．テーマ，キーワード，学習目標などの科目のシラバスを表 2 に示す．

表 2　ふくしフィールドワーク実践（美浜クラス）のシラバス（2023）

＜テーマ＞ 地域特性を考慮した防災の学び　－防災キャンプをツールとして－
＜キーワード＞ 知多半島，地域防災，自助共助，多職種連携，防災キャンプ
＜学習目標＞ 1）地域特性を考慮した被災時不安を考え，理解することができる 2）防災キャンプの趣旨や内容を理解し，実践することができる 3）自助と共助を理解し，被災時に地域のリーダーになることができる 4）防災・減災に対する多職種の連携を知ることができる
＜内容の要約＞ 日本福祉大学が 3 キャンパスを構える知多半島は，愛知県南部に位置し，東西が海に面した半島地域です．たった今起こっても不思議ではないと言われる南海トラフ大地震では甚大な被害が予想されています．例えば，「自然災害により道路が不通となり，支援が送れる可能性」，「愛知用水が被災した場合の水の供給不安」，「海に近い地域での液状化現象」，「半島南部に多い古くからの家屋の倒壊不安」など，知多半島は多くの被災時不安が指摘されている地域でもあります． 本科目では，防災・減災を 3 つの柱を中心にフィールドワークを展開します．一つ目は，被災時に自分や家族を助ける「自助」を身につける手段として，「キャンプの力（知識・技術・用品）を被災時の生活に活かす」ことを目的とした『防災キャンプ』の学びです．二つ目は美浜町の街歩きを通して地域の防災課題を発見し，隣近所や地域と共に災害に立ち向かう『共助』の力を身につけることを目的とした学びです．三つめは地域に住む方々との交流から，防災・減災に対する多様なつながりを知り，自らに活かす『多職種連携』の学びです． 本科目は一日の事前学習（土曜日 5H）と，一泊二日の宿泊型の防災キャンプや街歩きでの学び（5H），学びのまとめ（5H）で構成されます．事前学習では発災時の避難について学び，避難経路や注意点などの検討を行います．宿泊型学習では，地域住民とともに行う避難訓練や防災キャンプを中心に，大学内を避難所に想定した避難食づくりや宿泊体験を行う予定です．事後学習では学びの成果物として防災・減災に関する提言書をまとめ，発表会を行います．

3．授業デザイン

シラバスの学習目標を達成するために，科目の授業デザインを検討した．科目では，例えば街歩きや炊飯などの一つひとつの体験活動を「アクティビティ」と表現した．目標やねらいに沿って，複数のアクティビティを組み合わせたものを「プログラム」と表現した．プログラムやアクティビティにおいて，教員は，学生が受動的な姿勢で知識の提供を待つような状況や，教員自身も活動方法を指導するだけにならないよう心がけた．学生自身が考え，工夫して行動し，能動的に学べるようにファシリテーションすることを意識して科目に臨んだ．

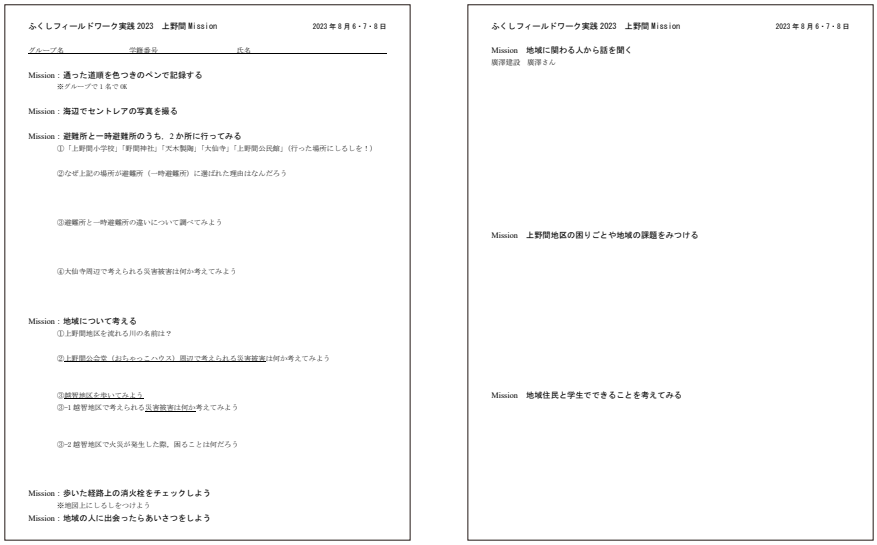
3. 1　地域特性を考慮した被災時不安を考え，理解することができる

人口が多くインフラが整備された都市部と，人口が少なく自然が多く残されている地方では想定される災害は異なる．地方でも，海では津波，山・丘陵部では土砂災害，河川では氾濫など，自然環境によっても警戒し，備えるべき災害は異なる．キャンパスが所在する愛知県美浜町が想定する被災時不安や防災課題の例を以下にあげる．

美浜町は伊勢湾と三河湾に挟まれた知多半島に所在する．東西の海岸線では地震による津波被害が想定され，半島中央の丘陵地帯では土砂災害等の被害が想定されている．フィールドワークを行う奥田地区と上野間地区は知多半島の西岸に位置する地域である．南海トラフ巨大地震では，最大 5m の津波による浸水が予測されている．コロナ禍にリモートでの出勤が増えたことによる転入者や、世代交代などで新しい家屋も増えてきてはいるが，古くからの家屋も多く残っており，家屋やブロック塀などの倒壊の危険性が不安視されている．上野間地区は家屋が密集している．地域内道路は狭く，自転車や徒歩でなければ通れない箇所も多数ある．消火栓が多く設置されているが，火災の際の消火活動が懸念されている．高齢者をはじめとした要配慮者や，避難行動要支援者も多く在住しており，災害時の避難行動や避難生活等にも課題がある．奥田地区には南知多ビーチランドがあり，観光客の避難も課題である．地域を南北に通る国道 247 号線は知多半島の外周を経由する幹線道路である．災害発生時には第 1 次または第 2 次緊急輸送道路として位置付けられ，防災上重要な路線でもある．

全てではないが，上記のようにフィールドとなる美浜

町の奥田地区と上野間地区だけをみても多くの被災時不安や防災課題がある．個人での対応ではなく，インフラの整備など行政単位で解決する必要がある防災課題を知ることは必要である．福祉を学ぶ本学の学生としては，さらに地域の身近な減災課題を知り，どのように地域と関われるかを考えることもとても重要である．クラスでは地域を知り，どのような災害が想定されるか，自分たちには何ができるかを考えて理解する必要性があると考え，プログラムを検討した．そこで，1）履修生自身が地域の街歩きを行うアクティビティと，2）地域に在住，または地域で働く人々から防災・減災への取り組みや課題を聞き取るアクティビティを検討した．1）の街歩きは，1 日目に上野間地区，2 日目に奥田地区で開催した．各日にはそれぞれ，上野間 Mission，奥田 Mission と名付けたワークシートを準備し，学生は Mission をクリアしながら街歩きを行った．1 日目の上野間 Mission は，オリエンテーリングのようにチェックポイントと Mission を設定し，街歩きで見るべき視点をイメージできるようデザインした．2 日目の奥田 Mission は 1 日目を参考に，自分たちで課題を見つけるよう設問をデザインした．上野間 Mission のワークシートを図 1 に，奥田 Mission のワークシートを図 2 に示す．


ふくしフィールドワーク実践 2023　上野間 Mission　　2023 年 8 月 6・7・8 日

グループ名　　学籍番号　　氏名

Mission：通った道順を色つきのペンで記録する
※グループで 1 名で OK

Mission：海辺でセントレアの写真を撮る

Mission：避難所と一時避難所のうち，2 か所に行ってみる
①「上野間小学校」「野間神社」「天木製陶」「大仙寺」「上野間公民館」（行った場所にしるしを！）

②なぜ上記の場所が避難所（一時避難所）に選ばれた理由はなんだろう

③避難所と一時避難所の違いについて調べてみよう

④大仙寺周辺で考えられる災害被害は何か考えてみよう

Mission：地域について考える
①上野間地区を流れる川の名前は？

②上野間公会堂（おちゃっこハウス）周辺で考えられる災害被害は何か考えてみよう

③越智地区を歩いてみよう
③-1 越智地区で考えられる災害被害は何か考えてみよう

③-2 越智地区で火災が発生した際，困ることは何だろう

Mission：歩いた経路上の消火栓をチェックしよう
※地図上にしるしをつけよう
Mission：地域の人に出会ったらあいさつをしよう

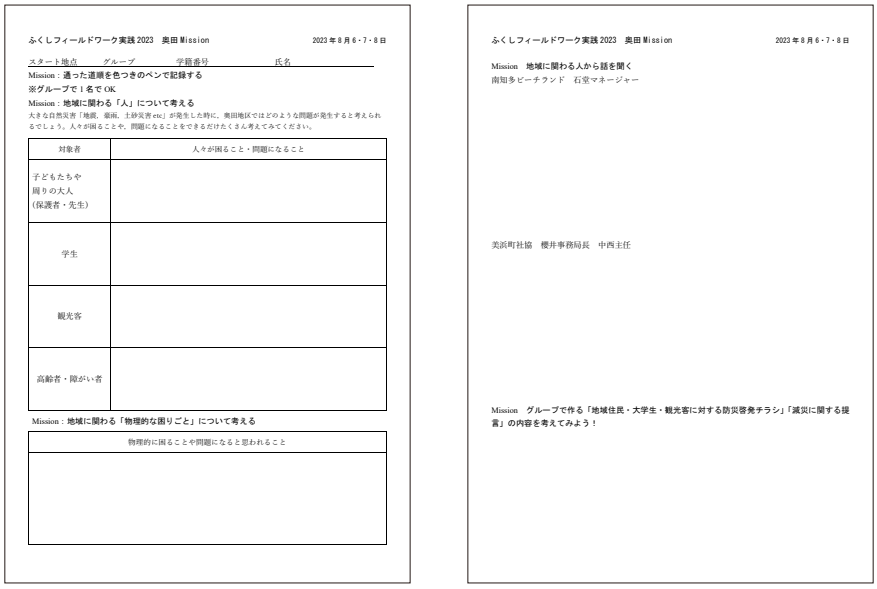
ふくしフィールドワーク実践 2023　上野間 Mission　　2023 年 8 月 6・7・8 日

Mission　地域に関わる人から話を聞く
廣澤建設　廣澤さん

Mission　上野間地区の困りごとや地域の課題をみつける

Mission　地域住民と学生でできることを考えてみる

図 1　1 日目の街歩きワークシート（上野間 Mission）


ふくしフィールドワーク実践 2023　奥田 Mission　　2023 年 8 月 6・7・8 日

スタート地点　　グループ　　学籍番号　　氏名

Mission：通った道順を色つきのペンで記録する
※グループで 1 名で OK.
Mission：地域に関わる「人」について考える
大きな自然災害「地震，豪雨，土砂災害 etc」が発生した時に，奥田地区ではどのような問題が発生すると考えられるでしょう。人々が困ることや，問題になることをできるだけたくさん考えてみてください。

対象者	人々が困ること・問題になること
子どもたちや周りの大人（保護者・先生）	
学生	
観光客	
高齢者・障がい者	

Mission：地域に関わる「物理的な困りごと」について考える

物理的に困ることや問題になると思われること

ふくしフィールドワーク実践 2023　奥田 Mission　　2023 年 8 月 6・7・8 日

Mission　地域に関わる人から話を聞く
南知多ビーチランド　石堂マネージャー

美浜町社協　櫻井事務局長　中西主任

Mission　グループで作る「地域住民・大学生・観光客に対する防災啓発チラシ」「減災に関する提言」の内容を考えてみよう！

図 2　2 日目の街歩きワークシート（奥田 Mission）

3. 2　防災キャンプの趣旨や内容を理解し，実践することができる

多くの被災時不安や防災課題を抱えている奥田地区や上野間地区では，下宿生活を送る学生が多く在住している．災害発生時には，地域住民や観光客もあわせて避難生活を余儀なくされる被災者となることが予想された．本学は複数の市町や教育機関と防災協定を締結しているが，美浜町とも防災協定（2011），津波時における学校施設の利用等に関する協定（2016）を締結していた．大規模災害では，地域との協力やキャンパスを避難所として活用することが決まっていた．そこで，被災時の生活の擬似体験や，減災のための備えを学ぶことが必要と考え，プログラムを検討した．アクティビティには，防災キャンプのコンテンツを活用することとした．防災キャンプは，キャンプの道具，知識，技術を活用し，被災時の生活に役立つ体験的な学びを得る手段として考えられた教育手法である（髙村 a　2020）．自然の中で生活するキャンプが，災害発生時の避難生活に類似していることから，防災・減災力を高める学びとして注目されている（髙村 b　2023）．防災キャンプでのアクティビティを体験しながら，被災時の生活を擬似体験できるようデザインした．アクティビティは 3 種類検討した．被災時に暖をとる，調理をするなどに利用する火について知る学びとして，火おこしと焚き火を体験した．被災時の食事を考える食育として，パッククッキングでの炊飯と，防災食による食事を体験した．2021 年度と 2022 年度はコロナ禍であったため開催できなかったが，避難生活や睡眠などを考える住についての学びとして，避難所設営や宿泊体験を2023年度は体験することができた．内容はテントを使った避難所設営と宿泊体験であった．

3. 3　自助と共助を理解し，被災時に地域のリーダーになることができる

自助と共助に関して，ギバーという考え方がある．ギバーとは「与える人」と理解される．ギバーには，自分の利益には無頓着で自分を犠牲にしてでも他者の利益を優先する「自己犠牲型」と，他者の利益にも自己の利益にも意識があり，自己の利益を損なわない「他者思考型」の 2 種類がある．自己犠牲型は，自助に対する志向が低いと考えられる．私見ではあるが，本学の学生は自己犠牲型の学生が多いと感じている．東日本大震災などの大規模自然災害の記録では，他者を助けるために自身が犠牲となった事例が散見される．まず自分自身の身を守る自助を実践し，自分に向かう救助を他者に向けることができれば，より多くの人命を助けることができると考えられる（髙村 b　2023）．自助，共助，公助について理解し，被災時にどのような行動をとるべきか，どのように助け合うかを知ることが必要と考え，プログラムを検討した．プログラムでは，特別なアクティビティを提供することはしなかった．他のアクティビティ中に事例を上げながら，自助や共助について学生と教員がディスカッションをする形式をとり，常に自助や共助について意識し，考えられるよう促した．自助と共助に関しては，さまざまな考え方がある．クラスでは（髙村 a　2020）の考えをもとに，自助に関して，「自分自身と家族や，身の回りにいる人それぞれが，自分自身の身を守るための学びを得ることを目的とすることから，『自分の命や家族の命，周りにいる人を守る』こと」と定義した．また，自助を実行するための知識や技術を自助力と定義した．共助に関しては，避難所での生活における被災者同士の助け合いに加え，被災地外からのボランティアが被災地・復旧支援に欠かせないことを考え，『地域コミュニティでの協力と災害ボランティアの協力』と定義した．また，共助を実行するための知識や技術を共助力と定義した．自助，共助について，最初に基本的な考え方を提示した後，3 日間を通して何度も繰り返し伝え，学生と教員や学生間でディスカッションを行なえるよう促した．地域に在住，または勤務している関係者に話を聞くアクティビティを行った際にも，話題提供者に自助，共助に関する話題を入れていただくよう依頼した．

3. 4　防災・減災に対する多職種の連携を知ることができる

多職種の連携を学ぶためには，地域において実際に防災・減災に対する活動がどのように行われているかを知ることが必要と考えた．そこで，3.1 で検討した、地域に在住，または地域で働く人々から話を聞くアクティビティを活用して、地域の防災・減災活動や，他職種同士でどのような連携があるかについても話題として取り上げるよう依頼した．話を聞く際に教員は，学生が受け身の姿勢で話を聞くのではなく，出来うる限り，座談会のように双方の意見を交換しあったり，学生の発言を引き出すようにファシリテーションをすることを意識した．2021 年はコロナ禍であったことから，話題提供者は大

学の施設関係者 1 名であった．2022 年の話題提供者は，地域の建設業関係者 1 名と，地域に所在する南知多ビーチランド関係者 1 名と，大学の施設関係者 1 名であった．2023 年度の話題提供者は，地域の建設業関係者 1 名と，南知多ビーチランド関係者 1 名に加え，美浜町社会福祉協議会職員 2 名とのアクティビティを行った．話を聞く方法は，建設会社と南知多ビーチランドを街歩きの Mission に加え，訪問する方法をとった．社会福祉協議会職員は美浜キャンパスに来校していただき話を伺った．

3.5　地域の被災時不安や防災課題に対する提言

各プログラムはランダムに決定，もしくは防災課題に対して類似した考えを持つ 2 ～ 3 名の学生でグループを構成し活動していた．学びのまとめとして，3 日目に地域の被災時不安や防災課題に対して，学生が考えた解決策や，学生が協力できそうな共助方法など，地域に対する提言を検討し，チラシやプレゼンテーション等の成果物を作成するアクティビティを検討した．成果物の作成は本学が学生に提供している Microsoft　Office365 の Word，PowerPoint の他，機能の制限はあるものの Web 上で無償使用できるデザインソフトの Canva を紹介するなど，複数の選択肢を提示して自由な方法で制作に取り組んだ．制作時間は 4 時間程度であった．制作物は，最後に履修生全員の前で発表することとした．発表の模様は動画撮影し，本学が学生に提供している Google Workspace のコンテンツである YouTube 上に設置した．動画は URL を知っている者のみが視聴できる設定とした．コンテンツは、履修生の振り返りや、次年度の履修生が成果物作成のイメージができるよう事前学習に使用した．また，話題提供者や学内関係者に公開して意見や感想を得た．学生が制作した成果物を抜粋して提示する（図 3，図 4）．

図 3　履修生が考えた防災・減災に関する提言例①

図 4　履修生が考えた防災・減災に関する提言例②

４．授業評価

4.1　学生からの評価

本学では，前・後期終了後に授業評価アンケートを行っている．2021 年度のアンケートが存在せず，2023 年度のアンケートは集計前のため，2022 年度の授業期間終了後に行われた授業評価アンケートから科目に対する評価を調査する．また，2021 年度，2022 年度，2023 年度の科目終了後に教員が独自で課した学生の感想も参考とする．授業評価アンケートの設問は 13 問である．評価は 5 ポイント評価で，点数が大きいほど評価が高い．設問の中から，授業の評価や理解に関する設問を抜粋して列挙する．1）科目に対する総合的な満足度を問う設問に対する評価は 4.77 ポイントであった．2）授業テーマや目標は明確だったかを問う設問に対する評価は，4.85 ポイントであった．3）科目の内容が十分に理解できたかを問う設問に対する評価は，4.62 ポイントであった．4）科目に対し，主体的，積極的に取り組んだかを問う設問に対する評価は，4.69 ポイントであった．5）科目での学びが，今後の学習や学生生活に役立ちそうかを問う設問に対する評価は，4.62 ポイントであった．その他 8 問に関しても，全て 4.6 ポイント以上であった. 全ての設問において非常に得点が高く，学生が満足する授業を提供できたと考えられる．

学生の感想に関して，まずポジティブな意見を整理する．

1）異なる学部・キャンパスの学生が一緒に学ぶことについての感想

- 他キャンパスの学生と一緒に授業を受け，いろいろな課題を一緒にできたのが良かった．
- この授業こそが多職種連携だよって先生に言われてものすごく納得がいきました．
- 最初緊張していましたが，1 日目の街歩きの課題で仲良くなれました．食事や宿泊でお互いのことを話す時間もあり，授業が終わっても繋がりを持っていたいです．

2）プログラムの内容に対する感想

- 街歩きフィールドワークは他の授業でも体験したことがありますが，この授業では何をすべきか明確になっていたので達成感がありました．
- 奥田の下宿生ですが，初めてビーチランドに行きました．これまで，美浜のことに興味があまりなかったけど，街歩きをしたことで他も色々と回ってみたいと思いました．
- いろいろな職業の方の話を聞いたり，お話ができたのは良かったです．地域の人と話をするのは大事だと思いました．
- 大学に宿泊したり，街歩きをしたり，なかなかできない体験ができました．ありがとうございました．
- もっと多くの学生が学ぶべき内容だと思いました．

3）今後の学びに関する感想

- 自分の実家周辺についても色々と調べたいと感じました．
- 身近な視点を持つことの重要性が理解できました．近所にどんな人が住んでいるのかなど，いろいろなことに興味を持っていこうと思います．
- 防災と減災の違いを知れたのは良かったです．自助力をもっとつけたいです．

学生からの感想は多くがポジティブな感想であった．ネガティブな意見についても整理する．

4）気候などの学習環境についての感想

- とにかく暑かった（2022 年度 9 月クラス）
- 美浜の寒さはやばいです．本当に寒かった．（2020 年度 2 月クラス）

5）科目の内容等についての感想

- 時間が足らなかった．通年でもいい．
- はじめてチラシづくりをしたが難しかった．作業自体は楽しかったけど，もっと時間をかけていいものを作りたいと思った．他にもこのような授業があったらいいと感じました．

ネガティブな感想と言っても，科目に対する否定的な意見ではなく，暑さ寒さなどの学習環境や，学びに対する能動的な姿勢が推察できるような感想が多かった．

4.2　話題提供者からの評価

地域に在住，または地域で働く話題提供者から，本取り組みについての感想や意見を集めた．話題提供者からのポジティブな意見を整理する．

- とてもいい取り組みだと思います．これまでも講義のように話したことはあったが，今回は人数が少なく，座談会のように話ができたので，学生の反応を感じることができました．
- 防災や企業に興味を持って活動してくれる学生がいることは本当に嬉しい．同じ地域にありながら，これまで協働して何かをすることはあまりなかった．今後

の協働に繋がることを期待している．

- 学生の反応が良くて，いつも以上にノッて話ができました．
- この科目がきっかけになって，何か一緒にできるような繋がりができてくるといいですね．

否定的な意見ではないが，ネガティブな要素が含まれた意見を整理する．

- 仕方ないことですが，最初はどうしても警戒心が強い学生が多いです．打ち解けるとよく話をしてくれるので，もっと時間があればと感じました．
- 同じ地域にありながら，来園したことがない学生が多かったのは少し残念でした．ただ，事実を知れたことは収穫です．今後どのような関係性を作れるかをもっと考えるきっかけになったと思います．
- 次年度も楽しみにしています．学生だけではなく，地域住民も一緒に参加できるようなしかけがあるともっといいのではないでしょうか．

話題提供者からは科目に対する否定的な意見は聞かれなかった．今後の広がりを期待する意見や，科目をさらによくするためのヒントなどを含め，建設的な評価を得ることができた．

5．今後の課題とまとめ

学生の感想や，話題提供者の意見や，担当教員間のふりかえりから今後の課題を検討した．

まず，開講方法についての課題を整理する．開講期間に関して，本学の集中講義期間が盛夏もしくは厳冬期に限られるという制約がある．このため，特に街歩きアクティビティに関して，学生は極端に暑い，寒い中で街歩きを行う可能性が高い．地域の子どもたちとの街歩きや，近隣の保育園との避難訓練なども検討されたが，いずれも参加者の体調を考慮して断念した経緯がある．これまで，体調不良者の発生や事故はないものの，気温等の環境についてはさらに細心の注意を払うことが課題となる．場合によっては開講時期の変更などを検討する必要もあるであろう．開講形態として，科目は 3 日間の集中講義方式となっている．学生からの意見で，時間が足らないという意見や，もっと深く学びたいという意見など，好意的な評価を多く得ることができた．時間の制約上，各アクティビティが体験程度の学びになってしまっていることは否めない．学生の学びに対する欲求に応えるためには，それぞれのアクティビティごとに学べる機会を提供することを課題としたい．

学生とのコミュニケーションについて整理する．本科目を履修した学生に対するイメージとして，学ぶということに対して意識の高い学生が履修していると捉えている．しかし，コロナ禍の 2021 年度は数名の履修辞退者が発生した．他に対面の授業が少なかったことや，感染への不安なども理由として考えられる．2022 年度のクラスでは 3 名の履修生と連絡が取れず，無断でのドロップアウト者が発生した．原因として，科目の連絡が少なかったことが考えられる．学ぶ意欲は高くても通常授業終了後の集中講義ということで，履修登録当時の意欲を持続できない学生がいたと推察される．科目の連絡は本学の LMS（Learning Management System）である nfu.jp のお知らせ機能を使用していた．開講前の連絡は 2 回であった．そこで，2023 年度は LINE のサービスの一つであるオープンチャットを利用し，開講前から学生とコミュニケーションをとる試みを行った．LINE オープンチャットはお互いの個人情報やアカウント情報などを交換することができないため，学生間で望まない不要な接触を避けることができるグループチャット機能である．開講前から，教員挨拶，どのような内容を学ぶか，学習イメージを持つための動画などの情報を提供した．開講中も，写真をとって共有する Mission や安否確認など，学生とのコミュニケーションを多くするよう意識した．その結果，体調不調でのドロップアウトが 1 名いたものの，その他は無断での履修辞退者が出ることはなく、全員が単位を取得することができた．学生とのコミュニケーションや，学びに対する意識を高める関係性を作ることは今後も課題とし，取り組みたい．

学びの内容について整理する．防災・減災は学生の興味関心を得やすいテーマであると考えられる．大学が所在する愛知県知多半島は，NPO や，行政や，社会福祉協議会などでの防災に対する取り組みが盛んに行われており，意識も高いと捉えている．愛知県では 2023 年度 6 月に豊橋、豊川で死者がでる水害が発生した．しかし，大学が所在する知多半島は災害による被害が比較的少ない地域と言われている．特に学生は，防災・減災に興味はあるものの，災害を我がことと捉えることができている学生は少ないと感じている．防災教育において，被災を他人事でなく，いつ自分が被災の当事者になってもおかしくないという意識を持つことは重要と考える．現在依頼している話題提供者は，災害発生時には防災リー

ダーとして活動される方が多い．学生に当事者意識をもたせるために，地域に在住している病気の人や障害がある人をはじめ，理解力や判断力をもたない乳幼児と保護者，体力的な衰えのある高齢者，言葉や地理に詳しくない外国人などの要配慮者や，避難行動要支援者となりうる人々の話を聞くことで当事者意識を知ることができると考える．話題提供者をさらに多様化することを課題としたい．次年度以降、さらに質の高い防災・減災の学びを提供できるよう研鑽を続けたい．

参考文献

小田郁予（2021)「学校における多職種連携研究の課題と展望 ― 連携概念の定義と連携研究を捉える視点 ―」東京大学大学院教育学研究科紀要　第 61 巻　PP353-364.

諏訪清二（2020）「防災教育のテッパン」株式会社明石スクールユニフォームカンパニー

髙村秀史 a（2020）「防災キャンププログラムの現状と課題 ― 地域特性を考慮した防災教育プログラムの開発に向けた取り組み ― 」日本福祉大学全学教育センター紀要 第 8 号 pp45-53.

髙村秀史 b（2023）「防災キャンププログラムに期待される効果と今後の展望」日本福祉大学全学教育センター紀要　第 11 号　pp32-39.

日本福祉大学 a（2016）「全学教育センター COC 関連新科目の科目概要作成の御願い」
全学教育センター 地域連携教育部門会議資料.

日本福祉大学 b（2019）「『ふくしフィールドワーク実践』の進捗状況と今後のあり方について」全学教育センター 地域連携教育部門会議資料.

謝辞

フィールドワークに協力いただいた美浜町の皆様，美浜町社会福祉協議会の皆様，南知多ビーチランド関係者の皆様に感謝の意を表する．本報告における授業実践は JSPS 科研費 JP21K18538 の支援を受けた研究成果を活用したものである．